

世界おもしろ文化比較

——丸い地球のいたずらと楽しみ——

国際電話の時差からくるギャップ

東京オリンピックで世界各国からの取材班が本国との電話
交信の際に経験したかもしれない、ちょっとした困惑。

エッ 日本は“地球の裏側”だって？



「ブラジルは日本の裏側なんかじゃない！」
と反発するブラジル人の言い分に理があり
そうです。



晴海のオリンピック選手村で

「赤道」クイズ・・・地球をまたぐ

「赤道」の正しい定義は次の4つのどれでしょうか？

「五つの『あ』の原則」とは？

あせらず、あわてず、あくせくせず、・・・

世界で語られている日本人についてのジョーク

タイタニックのエピソード

「その時、日本人だったらどう行動したか？」

定年留学、世界文学紀行でのエピソードから

定年後、スペインのマラガ大学に1年間留学。

続いて『ドン・キホーテ』を皮切りに15の世界文学作品の舞台を
訪ねた際の異文化体験。



赤道記念碑でポーズ

担当教師をファーストネームで呼ぶ

「ラファエル」「ローサ」「タケシ」・・・

外国人が学ぶ日本語の難しさ

ひらがな、カタカナ、漢字の3種もの文字がある。日本社会の潤滑油”謙譲“の表現をど
う伝えるか・・・

「日本食を食べてみたい」という留学生をアパートに招待

女子学生とは一人ひとりと両頬にキスし、男子学生とは握手で歓迎。

イタリア最新トイレ事情

歴史遺産そして芸術と美食の国イタリア。ピザ、スパゲッティ、ワインを
味わいながらの楽しい旅でしたが、一つとても困ること、それはトイレでした。

「ああ、ハグできなかつたマドモアゼル！」



『レ・ミゼラブル』の取材——パリのオペラ座
で美しいパリジェンヌとの楽しくも哀しい出会
いの夢のような物語。

(左の写真：パリのオペラ座)



寝ている間に仕事が進む「魔法のマクラ」

ホームページに掲載されている英語とスペイン語の翻訳チェックにまつわる裏話。

自己紹介

皆さまこんにちは。お忙しいなかお越しいただきましてありがとうございます。最初に、会場は参加人数も制限し、換気扇も動いており、皆さまとの距離も十分にありますので、マスクなしで話させていただくことをご了解いただきたいと思います。

一昨年から都合8回、この会場で世界の文学作品についての話をしてまいりましたが、今回はその総括とも言うべく、取材旅で出会ったハプニングや目に映った光景、またエピソードをご紹介してまいりたいと思っております。いつものようなパワーポイントによる写真の紹介はございませんが、話の面白さを楽しんでいただければと願っております。

私は現役時代に大学（早稲田）を卒業すると国立にあるNHK学園高校（NHKのテレビとラジオを活用した全国に生徒がいる通信制高校）の教師を務め、その後、新聞社の海外特派員としてパナマに約10年間駐在、主に中南米の国々を回っておりました。この間の訪問国は32か国。

中南米はブラジルのポルトガル語を除きほぼ全ての国がスペイン語です。スペイン語はほとんどできないまま特派員として35歳で赴任しましたが、10年近くの長い駐在期間もあって現地でたたき上げのスペイン語を身につけることができました。そこでせっかく学んだスペイン語を学問的にもキチンと系統立てて理解しておきたいと思い、60歳で定年になるとスペイン語の本国・スペインのマラガ大学に1年間留学した次第です。

ところで、スペインといえばセルバンテスの作品「ドン・キホーテ」が有名ですね。その舞台ラ・マンチャを訪ね紀行文をまとめたところ、郷里・長野県の信濃毎日新聞が5回の連載をしてくれたのです。「これはいけるかもしれない」なんて勝手に気をよくした私は、その連載がきっかけとなり世界文学紀行というなんともおそれた夢を掲げて作品の舞台を訪ね歩いてきた次第です。

セルバンテスの「ドン・キホーテ」から始まり、シェイクスピア、ユゴー、ゲーテ、ヘッセ、トルストイ、ドストエフスキー、ミッチェル、モンゴメリーなど、これまでに日本でよく知られている15の作品の舞台を訪れ写真も撮ってきました。訪れた国は11か国。紀行文は少しばかり雑誌等にも掲載され、この秋からは府中に本部を置き三多摩全域対象のTAMA市民塾で主な10作品について半年間の連続講座が予定されております。

さっそく本題に入ってまいります。これからの話しはそんな世界の各地への旅で遭遇した面白い現象や場面、またエピソードのオンパレードです。いっぱい楽しんでいただければ幸いです。

国際電話の時差からくるギャップ

一昨年の夏に開催された東京オリンピック。コロナ禍で開催そのものにも賛否両論さまざまな意見があり難しい局面もありましたね。私もボランティアを申請した時には現役時代の経験を活かし「広報・メディア」部門に登録されていたのですが、途中で晴海の選手村に配属となったのです。でも結果的に海外からの選手との交流がある程度できたのはラッキーでした。

一方で、本来の「広報・メディア」部門だったら、きっと経験したであろう時差の問題について現場に身を置き体験することはできませんでした。そこで、ここでは私の中南米特派員としての駐在体験の中からも「時差について」のエピソードからご紹介します。

ブラジルですべての取材が終わり原稿をまとめ本社に電話するのは夜の10時頃。日本では朝の10時です。日本とはちょうど12時間遅れの時差があります。

こちらはホテルのあまり明るくない部屋の灯りのもとで「コンバンワ」。ところが相手から戻ってくるあいさつは「オハヨウゴザイマス」。しかも、こちらは一日の仕事の疲れでブランデーなど寝酒の時間なのですが、相手は朝の空気を胸いっぱい呼吸、モーニングコーヒーで張り切っているときなんですね。

この時差からくるギャップ！ 最初の挨拶言葉が噛み合わない戸惑いに直面したものです。一昨年のオリンピックで、東京から自分の国にニュースを送った世界各国の特派員も、きっと同じようなことを経験したであろうと推測しているところです。来年のパリで開催のオリンピックでも同様の現象が起きてくると想像されます。

皆さまも、海外旅行でその滞在地から日本にいる家族に電話したときは、同じような場面に直面したこともあったのではないのでしょうか？いかがですか？

世界地図<板書>

“エッ 日本は地球の裏側” だって？

そう、ブラジルといえば、こんなこともありました。位置はちょうど日本の真反対にあります。これをある時、ブラジル人と話をしていた「日本の真裏のブラジル」と言ってしまう、ずいぶん反撥されたことがありました。

「何言ってるんだい。ブラジルから見れば日本こそ裏側じゃないか！」と。たしかにその通りですね。円い地球から見れば、どちらが表でどちらが裏かは決められないわけです。

ちなみに、南米で見る世界地図は日本のものとはかなり違っています。日本の中学校の地理で学ぶ最も一般的なメルカトル図法では、日本が地図のほぼ真ん中にあり、その左側にアジア、ヨーロッパのユーラシア大陸とアフリカ大陸、右側に太平洋をはさんで北米大陸、南米大陸が描かれていますね。ブラジルなどは右下の端の方にある。

ところが、あちらの地図では、真ん中に北南米大陸が描かれています。ですから、日本の位置はというと、ずっと左上の端、日本製の地図で見るイベリア半島の端、世界の外れのような位置になるのです。彼らの言うことも分かるような気がしますよね。

子供のころ聞いたラジオの天気予報では「表日本は晴れますが、裏日本は雪でしょう」と言っていました。皆さん、今は何と言っているかご存知ですよ？

そう、表日本ではなく太平洋側、裏日本ではなく日本海側ですね。やはりそこに住む人にとっては「裏」と呼ばれるのはあまり気持ちよくないわけです。なかには山陽地方と山陰地方についても、山陰を山光（山の光ですね）と呼んだらどうだろう、と提案する有識者もおりますよね。

「赤道」クイズ・・・地球をまたぐ

ここでクイズをしてみましょう。これは中学校の総合学習の授業の際に生徒によく聞いてみる質問です。人生経験の豊かな皆様にこんなことを聞くと失礼に当たるかもしれませんが・・・

地球儀または世界地図に描かれている「赤道」の正しい定義は次の4つのどれでしょうか？<板書の地図を示しながら>

- ①「地球上に引かれている赤い線」
- ②「地球上の最も暑い点のつながり」
- ③「地球の横腹を一周し北半球と南半球に二分する線」
- ④「地心を通って自転軸に垂直な平面が地表に交わる大円」

<2度読み上げ、各々を解説、正否を確かめていく>

3番、4番は一応、正しいといえるでしょう。でも2番は異論が出てきて、必ずしもそうではない、さらに1番ともなると論外ですよ。

エクアドルに行った時<実は国名の「エクアドル」とはスペイン語で「赤道」の意味なんです>、私はその「赤道標・赤道記念碑」といわれる塔を訪れました。首都キト市から郊外へ車で小1時間。荒涼とした禿山のふもとのやや広い台地に、基台の各辺が約8m、高さ15mほどの、先端に向かって細くなっていく四角柱が立っていました。その上に直径3mほどの地球儀がのっかっています。<レジュメの写真です>

四角柱の各面には、それぞれ [E] [O] [S] [N] (板書) との文字が刻まれています。それぞれスペイン語で「東」「西」「南」「北」の頭文字なんですね。

[Este 英語ではEast (東), Oeste 英語ではWest (西), Sur 英語ではSouth, Norte 英語ではNorth. ですね。

「E」(東)と「O」(西)面にあたるコンクリートの地面の真ん中には、幅15cm、深さ5センチほどの1本の線がはるか遠く東西に伸びていました。これこそまさに「地球を南北に二分する」という“赤道”なのですね。

でも冗談ながら、色は何もついていませんでした。赤色でもなく、地面の汚れと土ぼこりでそれは黒色に近くなっていました。私は先に友人から聞いていたアドバイスを思い出し、その線を両足でまたぐと、持っていたカメラを同行の友人に渡し、ポーズをとったのです。友人は破顔一笑。「セニョール・シミズ!とうとう地球をまたぎましたネ」——と。この瞬間、私は地球の南北両半球に足をかけたことになるのだというんです。

たいそうなユーモアですが、言われてみるとついそんな気になってしまうから面白いですねえ。もちろん、またいだ両足も大事な股間にあるものも、熱さでヤケドをするようなことはありませんでした。

周囲の気温は暑さとは程遠く、摂氏10度前後で肌寒いほど。キトが海拔2800mの高地にあるからです。ここから西に1000キロ行くと、同じエクアドル領のガラパゴス諸島（位置を略地図に書き込み）があります。ここは太平洋の赤道直下。キトから120人乗りほどの飛行機で島へも足を踏み入れましたがここは1年中30度前後の熱帯でした。巨大な象亀や恐竜に似たイグアナなどが庭で食事をしているこちらの足元まで近づいてきます。

この赤道の下半分（この「下」という表現もあまりよくありませんね）、南半球では四季も反対になります。日本は今、春から夏に入るところですが、南米のブラジルやアルゼンチンでは、秋から冬に入るところなんですね。

「五つの『あ』の原則」

ところで、これだけ交通や通信の手段が発達しても、それぞれの国の人々の生き方や生活慣習はそんなに変わるものではありません。

新幹線が10分か15分おきに正確にピタリと発着する。都内の通勤電車も2～3分おきに入ってくる。少しでも遅れると皆イライラし出すという日本です。

それに比べ、私の駐在していたパナマではそうした問題はありませんでした。（略地図からパナマの位置）それは電車がなかったからです（もっともパナマ運河に沿って運河鉄道があり最近ではパナマ市に地下鉄ができましたが）。小さな国なので近場へは自動車かバスで、国外へは飛行機が一般的でした。

そんなとき、分、秒を争う時間正確な日本の競争社会から、何事においてもゆったりしたリズムのラテン・アメリカ（中南米）に赴任したばかり、ずいぶんイライラしたものでした。

向こうは何事も「**アスタ・マニャーナ**」 **Hasta Mañana**（板書）でよいのです。これはスペイン語で「あしたまた」「あしたまで」という意味ですが、定時の5時または6時になると、仕事が途中でも、店にお客さんがいても「アスタ・マニャーナ」で帰ってしまう。仕事の約束の期限が守られなくても「アスタ・マニャーナ」。それよりも自分の生活を大切にしているんですね。

パナマでも、夜遅くまでオフィスに電気のついているのは、大部分が日系の駐在企業でした。もっとも、先ほど申し上げた時差の関係、ということもあり得ます。パナマと日本の時差は14時間。東京本社が昼間の時間に上司と連絡を取るためには、パナマでは夜の時間に電話をしなければならないからです。

ところがパナマ人は、社員のみならず役員も、官庁の局長クラスの幹部職員も、定時には殆ど帰ってしまっているのです。

私も、「これこれ、しかじかの取材をして○日までに記事を送れ」との指示を東京本社から受け、一生懸命取り組むのですが、なにせ相手のあることです。はかどらない交渉と仕事とどうとう「五つの『あ』の原則」を編み上げたのです。

<板書>

「あせらず」「あわてず」「あくせくせず」「あてにせず」それでも決して「あきらめず」――

この「五つの『あ』の原則」を心にとどめている限り、それほどイライラすることも

なくなってきました。海外ではまさに **When in Rome, do as the Romans do!**

“ローマにいる時はローマ人がするように振る舞う。つまり“郷に入ったら郷に従え”が大事なんですね。

「日本に行ったら日本人だらけだった！」

もう一つの大きな特徴は人種の混交です。

よく、昔からニューヨークは“人種の坩堝（るつぼ）”と言われてきましたが、首都のパナマシティも同じでした。ある時、日本での研修会に参加したパナマ人が帰国するなり言ってきました。

「S rシミズ (Mrシミズ)、日本での研修会は素晴らしかった。大勢の仲間にも会うことができ、あのシンカンセンにも乗ることができた。日本人は本当に親切で感激しました。充実した日本滞在だった。でも、とっても驚いたことが一つありました。それは、日本に行ったら日本人だらけですネ」と。

先住民のインディオ（インディアン）と、新大陸の発見以来、ヨーロッパからやってきた白人、それにパナマ運河の建設時に労働者として入った黒人や中国人。その子孫。そしてその混血。またその混血……。極端な言い方をすれば、100人集まれば、100人の肌の色が違うパナマからすれば、彼の発言もうなずけるような気がします。

もっとも、日本も近年は、いろんな国の人々が東京にまた地方にも住むようになり、状況はかなり変わりつつありますが……。現在は日本に避難してきたウクライナの人々もテレビに出たりして国際化が少し進んでいますね。先月末に発表された日本の将来の人口推計では2070年には外国人が1割を占める、といいます。国際化は待ったなし、といった時代がやってくるわけです。

世界で語られている日本人についてのジョーク

海に囲まれた、世界の中でも特異な存在である日本と日本人についていろんなジョークがありますが、タイタニックが一番良くできているでしょう。タイタニックの映画をご覧になった方？ **(挙手)** 世界で最も上映されてきた映画の一つですね。そのタイタニックでよく知られたジョークがあります。もしかしたらこの会場にも知っていられる方もいるかもしれませんが……。

映画の中で最もショッキングなシーン！

「いよいよ沈没しかけた船から、男も女も我先にと救命ボートへ避難しようとした。大混乱になろうとしている現場で、婦人と子供を優先させようとして船長が説得を試みます」 **<揭示：レジュメの裏面にも英語と日本語の印刷があります>**

まずアメリカ人男性に：“Don’ t you want to be a hero?” 「キミはヒーローになりたいかないか！」(解説)「勇者は沈みぬ」など。

イギリス人男性に：“You are an exemplary gentleman. Aren’ t you?” 「あなたは模範的なジェントルマンだ！そうじゃないかい？」(〃)

ドイツ人男性には：“The law of your country states like this.” 「君の国の法律ではそうなっているよ」(〃)

イタリア人男性には：” If you jump in the ocean, all the women on this ship applaud you.” 「君が海に飛び込めば船の女性全員が拍手するよ」 (〃)

船長のどの言葉もその国の社会状況や慣習、法律をわきまえながらの説得です。

では日本人男性には：なんと行ったでしょうか？

“I think you had better behave as they do.” 「皆がするようにあなたも振る舞った方がいいと思いますよ」

このように、日本人は、まず周りに合わせようとする傾向があるんですね。周囲の目を気にし、突出することを恐れ、横並びを好み、他人のするように自分もする、という傾向を持っている。日本人は、他人の目を気にしすぎるように思います。

高校時代からの夢を実現

(スペインの略図揭示) ラテン・アメリカに10年間駐在、各国を訪ねて感じたこと、それは、これらの国の文化の原点はすべてスペインにある、ということでした(ブラジルのみポルトガル)。1492年、コロンブスが新大陸に到着して以来カトリックを軸にしたヨーロッパ文化が入っていったのです。

最初に申し上げましたが、私はいつかはスペインに行き、スペイン語の勉強と共にその文学の原点ともいべき「ドン・キホーテ」を究めてみたい、との夢を抱いていました。

こうして定年となった翌年の2002年、その夢に挑戦、スペインの地中海岸コスタ・デル・ソル(太陽海岸)にあるマラガ大学に1年間留学した次第です。留学の目的のもう一つは残りの人生のための「自分への再投資」との意義も込めていました。

担当教師をファーストネームで呼ぶ

ここで、留学したマラガ大学で体験・見聞をしたエピソードのいくつかをご紹介しますと思います。

まず、クラスの仲間たちはすべてファーストネームで呼び合います。当時60代だった私も同じ扱いです。20代の若者に「タケシ！」と大きな声で呼ばれていました。(後ろから2番目にアクセントが来るんですね。例えば「昭島であればアキシマ」と)。私たち生徒も教師に対して「ラファエル」「ローサ」と呼び捨てです。英語圏の大学でも基本的には同じですね。これの方が「セニョール・シミズ」「ミスター・シミズ」よりグッと親密感が湧くからです。

そんなあるとき、クラスで日本語と日本文化についてプレゼンテーションをすることが私に課せられました。そのとき発表した内容を簡単にご紹介してみますと：

テーマは「日本語の学習について」

日本語を学ぶ外国人がぶつかる壁

スペイン語は動詞の活用が難しいですが、日本人にとって発音は英語などよりも易しいです。「アエイオウ」の母音が同じだからです。その一方で、日本語はマスターするのに大変に難しい言語だと思えますね。理由の一つは文字。ご存知のように日本語の文字には3種類ありますね。ひらがな、カタカナ、漢字です。

ひらがな、カタカナともに50字弱ですが、漢字となると、ふつうに社会生活をするために知っておく文字（義務教育で学ぶ文字ですね）は約2000字になります。しかも、それぞれに音読みと訓読みがある。外国人がこれらの文字を理解し記憶するには、大変な努力と時間が必要なのです。

——それに、日本語では自分自身を表現するのに、10近くの言い方があります。

（揭示 → 参加者に他の例も聞く）

私（わたくし）、私（わたし）、僕、俺、我、拙者、内（うち）、手前、小生、等々。

「わたくし」はより丁寧で上質の表現です。「わたし」は比較的丁寧な表現で、最も一般的に使われていますね。

「僕」「俺」「我」「拙者」とも男性が使用。このうち「僕」はより口語的で、「俺」はやや丁寧さを欠き、「我」はやや古い表現、「拙者」は昔、武士が用いた言葉ですね。

「内」は両性によって使われます。「手前」はへりくだった古い表現。「小生」は主に手紙や書き物の中で、やはり、へりくだった表現として使われますね。日本の社会で大切なのは「謙譲」の心です。これをわきまえないと、まわりから「あいつは傲慢だ。頭が高い」と言われかねないのです。

スペイン語では、自分を表現する言葉は「Yo」の一語だけです。英語でも同じ「I」だけですね？ もちろん、動詞や助動詞の使い方によって、丁寧の度合いを変えていくことができます。でも、日本語の尊敬語、丁寧語、謙譲語ほどの複雑さではないと思います。こうした日本語の複雑さと難しさについての発表でした。

留学生仲間をアパートに招待

ここからは楽しい話に移りましょう。クラスが始まって半年ほど経ったあるある日、日本料理についてクラス仲間と話しているうちに、いつしか彼らを自宅に招待してあげる流れになっていました。背景には、私が定年1年目にクッキングスクールに通っていたことから、和中華合わせて100くらいのレシピを学んでいたこと、それに、遠く母国を離れて学ぶ若い留学生たちの親代わりみたいな気持もあったのです。

当日は妻に手伝ってもらいながら5品ほどの料理を用意。それに寿司を食べてみたい、という彼らの要望に応じて、スペインマグロを近くの市場で手に入れ、初めて握り寿司なるものも作ったのです。寿司は小さなおにぎりのようになり、長方形には仕上がらなかったのですが、上にワサビを塗ったマグロの切り身を置くと、結構いけそうなものとなったのです。

してやったり。すし握りの初体験です。しかも海外で、外国人に食べてもらうなんて、こんな素晴らしい体験はなかなかできるものではありません。

準備がほぼできたところへアパート玄関のベルが鳴り、クラス仲間の8人がぞろぞろと部屋に入ってきました。男性1人、女性7人。

「ムイ ビエンベニード！（Welcome, ようこそ）」

私はエプロンをとると玄関に立ち、女性とは一人ひとりと両頬にキスし、男性とは力強い

握手で来宅を歓迎しました。学校内では、恋人同士でもなければキスすることはありません。でも、学校を外れたとき親しい間柄での最大の歓迎はキスなのです。キスといっても、唇ではなく、そっと抱き合い両頬を触れ合うだけのものですが、(スペイン語ではベソと言います) これをしないと却って歓迎の意が弱く、堅苦しい雰囲気になるからです。

とはいえ、金髪の美人女子大生とのキスは、瞬間的でも心をときめかすものがあります。妻も同じように全員と、しかも男子学生ともキスしているのでこちらも問題ありません。還暦を過ぎて、若い外国人女性と頬を触れ合わせられるのも、スペインという文化風土にいたからこそ、なのでした。

イタリア最近トイレ事情 2009年11月記 <イタリアの略地図揭示>

次は10年ほど前になりますが団体旅行でイタリアを訪れた際のレポートです。少し長く、時間がかかるのでどんどん読み上げて参ります。

歴史遺産そして芸術と美食の国イタリア。ピザ、スパゲッティ、ワインを味わいながらの楽しい旅でしたが、一つ、とても困ることがありました。それはトイレです。「イタリア人はみんなウンコをしないかな？」なんて冗談めいた疑問まで出てきます。私も「トイレ学者」でもなく、全国の実態調査をしたわけではないので、以下の記述は決して正確とは言いきれません。グループ旅行でたった1週間のイタリア滞在の間に私の目に映った事実と印象です。偏見があるかもしれません。

でも、「海の水が塩っからいのを知るのに、太平洋の水を全部飲まなければならないということはない」との言葉もあります。食事とともに人間が生きていくための最も大事な営みの一つ——この“用を足す”という営みに、ことのほか気を遣わざるを得なかったからです。

以下は、思い出すままに綴った見聞・体験記です。

- まず、どこに行ってもトイレの数が少ない。空港でもレストランでも観光地でも。到着したミラノの空港。バゲッジクレームの場で自分のトランクが出てくる間に、フロアの端にあるトイレに小用で駆け込んだ。二つの仕切りのある扉を押し入ってみて驚いた。男性用の「小」用は一つのみ。「大」用に二つあっただけだった。早く済ませて次の人に、と力んでも、衰れなるかな、高齢からくる前立腺肥大の傾向があり小用でも時間がかかる。そのときは、自分の後には一人だけで助かった。もし大勢が一列に並べられたらどうなるだろうか、と一瞬思ったものだ。
- このトイレの件では食事の前や移動の際、ガイドが口をすっぱくして強調していた。「バスに乗る前に必ずトイレを済ませておいてください！レストランでもトイレは男女一つずつしかありません。私たちのグループ30人あまりの人が食事を終わって一斉にトイレに行ったら、仮に1人2分でも1時間かかってしまいます。次のスケジュールに間に合いません。どうか皆さん、食事中でも頃あいを見はからって、遠慮なくどんどん行くようにお願いします」
- 一部を除いて、全体的にどこもあまりきれいではない。設備も古い型だ。近年、JRの駅のトイレがずいぶん近代的できれいになっており、また各家庭にウォッシュレット

トなどが普及している日本から訪れると、ルネッサンスの発祥地イタリアに来て、なんだか半世紀ほど昔に戻ったような感じになる。一方で、ホテルの便器の隣には日本にはないビデがある。かつて、ここで顔を洗った日本人旅行者がいた、なんて笑話話が語られたこともあるが……。ガイドの説明によると、実はウォッシュレットの淵源はこのビデだという。

- 便座が壊れ、あるいは盗まれてしまっているもの、ドアの鍵が壊れてしまっているものもある。帰国時のローマのレオナルド・ダ・ヴィンチ空港の出発ロビーの男性用トイレ。大用が7つあった中で3つが壊れていた。一つはドアのノブが回らず出入りができない、一つは入って閉めるとロックが壊れていてドアが閉まらない、一つは誰か使っているわけでもないのにドアが閉まっていて開かない。便座は見た限りではすべてにあった。
- 公衆トイレのほとんどが有料である。ハイウエイのドライブインでも同じ。使用料というのだろうか、それともチップといった方がよいのだろうか。ちなみに料金は訪れたミラノ、ペローナ、シエナ、ローマ等の都市では大部分が1回 50 ㇰ (約 70 円) だった。雨のそぼ降る夕方、「ロミオとジュリエット」の舞台ペローナ市の広場にある公衆トイレに入った。地下1階に入っていくと、劇場の入場券売り場のような受付があり、窓ガラス越しに料金を支払うようになっていた。
- 水の都ベネチア(ベニス)では、たった 100cc 前後 (人によって違いがあるが) の水を体内から排出するのに2ユーロ (約 280 円) も払わなければならなかった。生理現象とはいえ、何回も利用したら結構な額になる。ここで、イタリアを訪れる旅行者が、ホテルの外で1日に何回、用を足すか、その合計額を想像してみるとよいだろう。トイレが近い私自身も、ときどき小銭がなくなって当惑することにも直面した。イタリアでは予想外に小銭が必要なのを身をもって知らされたものだった。
- ついでにもう一つ。これは私自身に“責任”があるものですが……。 「小」をやるときの朝顔が“放水”の位置ぎりぎりまで高いのがまれにあったことだ。かつて北欧の空港に寄ったとき、朝顔の位置があまりに高く、つま先立ちをしながら用を足したことがある。男性の平均身長が 180 センチに近い長身の北欧の人々に比べて、日本人の中でも短足の自分の悲哀である。イタリア人は北欧ほど長身ではないから助かったものの、こんなトイレも時にはあることを、これからイタリアを訪れる日本人の参考までにご報告しておきたい。

——以上、日本からの一旅行者として体験です。大好きになった、またお世話になったイタリアの悪口を言うつもりは毛頭ありません。食とともに人間にとってトイレは最も切実な課題です。素晴らしい歴史遺産をもつ観光大国のイタリアが、外国(特に日本)からの観光客の印象をさらによくするための参考になれば、との強い願いと想いを込めて綴ったもので、東京にあるイタリア大使館に丁重な手紙を送ってあげたのですが、残念ながら返信はありませんでした。気を悪くしたのではないと思うのですが……。

この機会に、未開民族も含めた世界のトイレ文化の研究も意義ある貴重な仕事、どなたか取り組んでくれたら面白いだろうナ、なんて思った次第です。

「ああ、ハグできなかつたマドモアゼル！」

最後に、出版150周年で訪れたヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』に関する楽しくも哀しいエピソードをお話をしたいと思います。ジャンバルジャンとコゼットのあの感動的な物語を読んだ、または映画を見た、ミュージカルの舞台を鑑賞した、という方は多いと思います。(小説を読んだか、映画またはミュージカルをご覧になった方?)

パリに到着した最初の日の午後5時ころ、少し時間があつたのでオペラ座で公演中の舞台を観賞することにしました。劇場はパリのほぼ中心にあります。

急な思い付きだったので予約席券はありません。入り口で自由席券(100ユーロ、約14,000円)を買うと、空いていると思われる席のところに行きました。隣の席には若くて美しいパリジェンヌ・フランス人女性が座っています。そこで私は英語で尋ねました。

“May I take this seat?”(この席に座ってもよろしいですか?)

彼女も私の英語がわかつたらしく“Sure, of course”(ええ、どうぞ)とニコリとうなずきました。フランスでは意外に英語のできる人が少ないです。英語ができてても自国語<フランス語>への誇りから話そうとしない人もいるとも聞いたこともあります。

親しみを感じた私はこの機会に、これから訪問しようとする二人のフランス人作家(ビクトル・ユゴーとアレクサンドル・デュマ)の作品の舞台や場所について相談しようと思ひ話しかけました。「ジャンバルジャンがコゼットの恋人で内戦で傷ついたマリウスを背負って逃げた下水道はどこだったのか」聞きたかつた。

と、彼女は言ったのです。

「もうすぐ幕が開くから時間がありませんね。あなたの訪れようとする作品については私もある程度は知っていますから参考になるお話をできるかもしれません。よかつたら自宅にいらっしゃいませんか。家はここからそんなに遠くありませんから」

“なんとラッキーな!”

私はオペラ座を出ると胸を躍らせながら彼女のあとについていきました。確かに家はすぐ近く、瀟洒なマンションの3階でした。「よろしかつたらどうぞ」。部屋に入ると彼女は親切にもワインを差し出してくれ、言ったのです。

「ゴメンナサイ。少し汗をかいてしまったからちょっとシャワーを浴びさせてね」

そう言う彼女はバスルームに入っていきました。応接間にひとり残つた私はワインを口にしながら彼女の出てくるのを待っていました。10分ほどして彼女がバスルームから出てきました。

と、なんとという驚き!!

彼女はうすいピンク色のネグリジェをまとっただけなのです。スレンダーな美しい身体が透き通つて見えてきます。私はショックでどこに目をやつてよいかわからず、ソファに座つたまま動きがとれずにいました。

と、彼女はぐんぐん私に向かつて歩いてくると両手を広げたのです。私をハグしようとしているのです。

「ここで応えなければニッポン男児の名が捨たる」。私は彼女のあまりの美しさに見とれ我を忘れたように立ち上がると、思いっきり彼女を抱きしめようと両手を広げました。ところが・・・

——その瞬間、私は夢から目が覚めたのです。時差で朦朧とした目をこすりながら、ホテ

ルのベッドの上で枕を抱いていたのでした。パリと東京には8時間の時差があります。夕方
の5時は日本の真夜中の1時になっていたのです。

寝ている間に仕事が進む「魔法のマクラ」

時差の話をつくつかしてまいりました。最後に私のパソコン生活最前線のエピソードを
ご紹介してみます。

ちょうど15年前にホームページを立ち上げ英語とスペイン語のページも設けました。
でも、正しい翻訳のためはネイティブチェック(その言葉を母国語としている人)が必要で
す。私も日本に住んでいる外国人の友人もいますが皆忙しい。それにチェック料金も取ら
れるかもしれません。そこで特派員時代に知り合った友人で、英語はアメリカに住むK(ケ
ネス)さん、スペイン語はパナマに住むM(モレーノ)さんに頼むことにしました。

こうして、翻訳した原稿を夜、メールに添付して送っておくと、時差の関係で向こうは
昼間。早いときには翌朝には私のパソコンにチェックされた原稿が戻っています。つまり、
こちらが寝ている間に仕事は進んでいるのです。「あんたはいいね。魔法の枕を持っている」
なんて友人から揶揄されたこともあります。

更に、世界に事業所を持つグローバルな企業ではこんな芸当もやっつてのけます。

そこでは、パソコンによる一つの仕事を、インターネットを使い、例えばアメリカのニ
ューヨークから仕事時間が終わるとやりかけた資料をインドへ送る、インドでは続きの作
業をし夕方になると今度はイギリスへ送る、イギリスではまたその続きの作業をして仕事
の時間が終わるとアメリカへ投げ返す・・・

こうして地球の昼時間を追っかけてその仕事が継続されていく——つまりそれぞれの国
の労働者は仕事が終わって眠っていても、リレーされたその作業は24時間どこかの国で続い
ているのです。1日8時間労働として1日に3倍の作業が進んでいるわけです。

丸い地球の時差を活用！ 時代の最先端のご紹介です。

世界の文化比較から時差についてのエピソード、個人的な体験と、話しはあっちこっ
ちに飛んでしまいましたが、皆様が何かをお感じになり、今後の人生のヒントとなり、ご参
考になればこんな嬉しいことはございません。

以上で私の話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

この後、少しの間、皆さまからのご質問や感想の時間に充てたいと思います。

ご質問のある方、どうぞ手をお上げになってください。マイクを回すように致しますの
で。

懇談会のトピック例

- 旅費等の工面をどうしたか
- 海外旅行の安全事情について
- その他